

貧民の魂

アメリカのNGO

「スラム・カゼマンチ
 ャンゴは、エチオピアの首都
 アディスアババのスラムに
 住んでいる。母親は亡くなり、
 父親の行方は知らない。この
 サッカー好きの少女は、
 祖母に引き取られ、ここに
 暮らしている。」

四人が住む家は八畳ほどの
 広さ。入ったとたん、つく
 づくの痰がひとひある寒
 寒だ。汚れた毛布が土間に敷
 いてある。夜はだれかが寝る
 のだろう。裸體球がひらひら
 がらりと。奥は台所で、灯

地方の農村などから出てき
 た人たちが勝手に住み着い
 て、スラムはできた。屋根が
 カヤがきで、雨期には水びた
 したにもちかたな台所がある。
 トイレは空き地に穴を掘り、
 枯れ草を田んだけた。道路
 は大きな石がころころして滑
 防車も入れない。

このスラムの総合開発は、
 国際NGO(非政府組織)の
 ブラン・インターナショナル
 (本部・英国)日本の窓口は



論説委員 岡田 幹治

住民主体



NGOの技術指導で乾燥野菜づくり。農作業はたいい女性の
 の仕事だニケニアのニヤングワ・ウェンダニ村で、岡田幹治

日本フオスター・プラン
 会)が取り組んでいる。衛生
 状態をよくし、生活環境を整
 備し、人びとに生計の道を与
 えようという計画だ。
 今年六月に終わった一九九
 七年度の事業費は約八十三万
 円(約一億円)。四十の家を

建て直し、百五十二の共同合
 所と二百七十九の共同トイレ
 をつくった。四百五十軒の道
 路を舗装し、診療所つくりにも
 も取りかかった。
 スラムの中に、地域の女性
 が設立した貯蓄貸付組合の事
 務所がある。アセチ・ウォル
 チさん(ママ)がやってきた。綿
 を預けて手数料をかせぐ小
 さな商売を始める。その元手
 を借りるためだ。
 この小さな規模融資のた
 めのグループバンクを、ブラ
 ンは支援している。金融の知
 識をもつ担当者を養成し、組
 合が銀行と取引できるよりに
 あつせんし、貸付資金の一部
 を補助している。
 このNGOは、隣の国ケニ
 アでは、九つもの場で農村の
 開発事業を進めている。
 中部の町メルーから小型四
 輪駆動車で二時間ほど走り、
 現地のひと、ムバランガ村
 へ行った。

地域の将来像自ら決める

「大水で流れた橋をつくり
 かねた。雨水をためるタンク
 を六十軒の農家に設置した。
 小学校の教室を二つ造り、二
 百の机と二百五十人分の制服
 を寄贈した。図書館にあたる
 『本の銀行』をつくり、専任
 の司書を置いた……」
 村の住民開発委員会の委員
 長、ビーター・ムンガサさん
 が、この五年間の成果を
 数え上げ、さらに付け加え
 た。
 「新しい橋は、スプラマニ
 アム橋と名づけられているハ
 ーだ」
 スプラマニムさんは、三
 年前までプランのメルー事務
 所長。いまはケニア事務所の
 幹部に異動し、この取材に同
 行していた。
 ムンガサさんの言葉には、
 単なる社交辞令とはいえない
 親しさが込められていた。
 「開発援助」といって、大
 規模なダムや発電所の建設を
 思い浮かべがたが、アフリ
 カのような国々で人びとの生
 活を向上させるには、
 このような事業がまず必要
 だ。小規模なかんがい事業も
 薬局の設置と運営も、開発な
 のである。
 援助の実施にあたってブラ
 ンが心掛けているのは、住民
 を主体にするところである。
 ケニアの農村開発では、村
 落ごとに住民開発委員会をつ
 くっている。地域にとって何が
 必要なのか、そのために
 自分たちで何ができるかを徹
 底的に議論してもらおう。そし
 てNGOは、地域では入手で
 足りない資料と資金と知識を援
 助するのだ。
 委員会を例にとれば、
 千ほしんが造りや努力率
 住居住民の仕事。NGOは、
 建築のノウハウと窓枠のサ
 ッシやトレン屋根を援助す
 る。
 「地域の住民が何をもち
 び、将来の姿を自ら決定し
 ていく。これが援助の
 核にあるエンパワメント
 (住民への権限授け)の原
 動力」
 プランの東アフリカ地域の
 責任者スプラマニ・ベルベ
 スさんは、そう語った。

このように事業がまず必要

ルボ 貧民に挑む

アフリカのNGO

「私、昇進の機会をのがし
ちゃったの」

「フランク・メンデルソン(同)
が、ちよつと残念やうに打ち
明けた。

彼女は、国際NGO(非政
府組織)、プラン・インター
ナショナルのケニアにある現
地事務所の所長。今年になっ
て、同じアフリカのマラウイ
の責任者にならないかと打
診を受けた。しかし、二人の
子どろをもうシングルマザー
で、下の子はまだ小学生だ。
いま専任社員するのではでき
ないが断った。

世界の四十の途上国で援助
活動をしているが、プラン・イ
ターナショナルでは、約八十
人の国際職員が現地で指揮を
とり、四十人近い現地職員が
働いている。
ケニアの現地職員として最
初の一人だ。

西の地位にいたメンデルソ
ンを、別の国の責任者に抜
きしめようとしたところに、
このNGOの新しい運営態度が
みでた。過去十年ほどの
間に、「慈善団体」から「援
助の専門家集団」へ大きく変
身したのだ。

強調されているのが「効
率」である。先進国の人たち
からの寄付金を、できるだけ
無駄なく途上国の人びとのた
めに使う。そのためにリスト
ラウのあつじが叫びだした。
国際職員には、高い能力が
要求される。必要なのは、崩
壊についての知識よりも、人
事、財務、経理、対外折衝な
どをまかむ「経営」の能力で
ある。

論説委員 岡田 幹治

専門家集団

こんなカラダの家をトタン屋根の家に改築するの
も
開発援助のひとつケニアのカブルリ村で、岡田亨。



「こんなカラダの家をトタン屋根の家に改築するの
も
開発援助のひとつケニアのカブルリ村で、岡田亨。」

「現地のNGOと提携して事業
を進めることで、職員を十三
人、国際職員は責任者一人だ
けにしてしまった。
現地のNGOを育てるのも
国際NGOの役割、と割り切
り、今年、提携している現地N
GOのコンピューター三台を
寄贈、スタッフ三人を研修に
派遣した。国際NGOが去
った後でも、途上国が自立でき
るまで、との配慮である。
職員には相応の給料を出す
から、多彩な人材が集まる。
メンデルソンは、英米の大学
と大学院で学んだあと、ほか
の国際NGOで実績を積み
だ。エチオピアの組織を切り
盛りしているテスファイ・チ
クリさんは、航空会社勤務の
経験をもつ。月収約五千フル
タイム(フルタイム約十八円)は、こ
の国のサラリーマンとしては
最高給の部類に入る。

「現地のNGOと提携して事業
を進めることで、職員を十三
人、国際職員は責任者一人だ
けにしてしまった。
現地のNGOを育てるのも
国際NGOの役割、と割り切
り、今年、提携している現地N
GOのコンピューター三台を
寄贈、スタッフ三人を研修に
派遣した。国際NGOが去
った後でも、途上国が自立でき
るまで、との配慮である。
職員には相応の給料を出す
から、多彩な人材が集まる。
メンデルソンは、英米の大学
と大学院で学んだあと、ほか
の国際NGOで実績を積み
だ。エチオピアの組織を切り
盛りしているテスファイ・チ
クリさんは、航空会社勤務の
経験をもつ。月収約五千フル
タイム(フルタイム約十八円)は、こ
の国のサラリーマンとしては
最高給の部類に入る。」

「このNGOは、チャイルド
スポンサーシップという手法
で資金を集めている。援助す
る地域の家産から子どもを養
ひ、先進国でその支援者(フ
ォスター・ペアレント)を見つ
ける。援助資金はその子に配
されるのではなく、その子に
属する地域の開発に使われ
る。ペアレントには、子どもの
成長記録と地域の開発状況
が報告される。
日本で支援者を募る窓口
になってるのが、日本フォ
スター・プラン協会だ。月々
千円、年に六万円を援助す
ペアレントは日本に約六十
人。四十億円近い年間収入
の八五%が英国の本部に送金
される。チャイルドとペアレ
ントを結ぶ手紙などの翻訳を
するボランティアが全国に千
百人もいる。
きのう紹介したエチオピア
のピストラットちゃんのペア
レントは、札幌に住む石澤純
さん、淑子さん夫妻だ。十二
月前からお届け、いま三人目。
「秘匿しているわけを、純
子はこう語った。
「国際的に著名な会計事務
所の監査を受け、年々の報告
もきちんとしているのでも、
安心して援助できる。子ども
手紙のやり取りをしてくれ
ると、愛情もわいてくるよ」

効率と自立考え職員採用

「このNGOは、チャイルド
スポンサーシップという手法
で資金を集めている。援助す
る地域の家産から子どもを養
ひ、先進国でその支援者(フ
ォスター・ペアレント)を見つ
ける。援助資金はその子に配
されるのではなく、その子に
属する地域の開発に使われ
る。ペアレントには、子どもの
成長記録と地域の開発状況
が報告される。
日本で支援者を募る窓口
になってるのが、日本フォ
スター・プラン協会だ。月々
千円、年に六万円を援助す
ペアレントは日本に約六十
人。四十億円近い年間収入
の八五%が英国の本部に送金
される。チャイルドとペアレ
ントを結ぶ手紙などの翻訳を
するボランティアが全国に千
百人もいる。
きのう紹介したエチオピア
のピストラットちゃんのペア
レントは、札幌に住む石澤純
さん、淑子さん夫妻だ。十二
月前からお届け、いま三人目。
「秘匿しているわけを、純
子はこう語った。
「国際的に著名な会計事務
所の監査を受け、年々の報告
もきちんとしているのでも、
安心して援助できる。子ども
手紙のやり取りをしてくれ
ると、愛情もわいてくるよ」

ル市 貧民に挑む

アフリカのNGO

論説委員 岡田 幹治

へぎいた、きいた、チューリップのはなが
屋根も外壁もトタンがまの幼稚園舎に私が入っていくと子どもたちの元気な笑い声が、聞き覚えのあるメロディーに変わった。

ケニアの首都ナイロビの郊外ルーベン地区にあるスラムの一角、日本のNGO(非政府組織)「アフリカ教育基金の会」(AEF)本部・北九州支部)の活動の拠点だ。

ここには、幼稚園から小学校最後の八年年までクラスがあり、七百九十人の子どもたちが通っている。制服代など保護者の負担を公立校より安くしてあげよう、と、通いやすいのだ。

屋敷に給食になる。メーアス(トウモロコシ)と赤豆を煮込んだスープがボウルに一杯。こんな食事でも、スラムの子どもたちには大切な一食である。

併設されている職業訓練校をのぞくと、がらんとした教室で、若者が二人、動物の木彫りを指導員に教わっていた。

診療所では、病気の乳児を運れた母親が、看護婦に移ってもらっている。

教師、看護婦、運転手ら五十人を超す職員を使って運営にあたっているのは、随分員にのびているのだ。会計担当の中谷香さん(三三)が助け

国枝さんは慶応大から来り、トップバング大の大学院に進み、国際関係論を修めた。AEFにこの春採用されたのは、去年までボランティヤア活動をしたのがきっかけだ。中谷さんは、大学を出てAEF

助成金依存



先生の指導で元気に歌う子どもたち。スラムの住民はこの幼稚園を頼みにしている。ナイロビのルーベんで、岡田写す

に加わった。
「夜警を頼んでいませう。小切手を切つて」と職員が話

に給料を払わなければ、早く
夜警を頼んでいませう。
「この出勤は痛いわね」
「でも、払わないわけには
いかないだろ」
続いて、水道施設を修理し
ていた用務員が、鉄管購入の
承認を求めた。
こうして休むひまもない一
日が過ぎていく。

その国枝さんが、八月十四日に突然解雇された。「労働許可証の発行がケニアの入国審査局に拒否された」というのが理由だが、本当の理由は違ふと周囲はみている。
AEFは、本部の事務局長だった土井高徳・現会長(四七)と、アフリカ地域本部をあずかる土井啓・現事務局長(五七)の兄弟を中心に運営されてきたが、その方法に批判が高まり、九月までに理事十六人のうち十人が辞任する混乱に陥った。

その渦中で国枝さんは、啓たちに選挙金や文房具を送り、土井会長が呼びかけ、地元のホテル主が教師が一九八七年に結成した。その発想に共鳴して、西方さんは理事も支

部長を引寄せた。
しかし、日本の郵政省や国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)から巨額の助成金を受け、事業を急拡大するにつれて、運営に疑問を抱くようになる。
組織の能力や経験に見合った業務規模に縮小するよう、三年前に訴えたが受け入れられなかった。
「会員が三百五十人、年間の会費収入が二百万円にも満たない小さなNGOが、今年度は五万四千十三の現地事務所を置いて九億円もの事業をする。考えてみれば無謀だ。たのいす」
「AEFは、情報も決定権も一人の兄弟に集中していた特殊な例で、ほかのNGOはきちんとした運営をしている」と西方さんは強調する。

事業急拡大で運営に混乱

だが、日本のNGOには、この数年の間に助成金への依存度を急が高めたところが多い。活動資金の大半を公的資金に頼っていて、本営のNGOといえそのだめだ。

貧困撲滅

アメリカのNGO

今月二十四日夜七時、東京・内幸町のビルの一室で、佐々木和之さん(53)、八十人ほどを前に、エチオピアで始めた一農村の自立支援活動について報告していた。スライドで現地の様子を映し、談々と話を進めていく。

佐々木さんは、日本国際航路対策機構(JIPIH)というNGO(非政府組織)から派遣され、昨年三月からの活動に取り組んでいる。一九八八年から四年間、同じNGOのエチオピアでの農村開発事業に加わった後、米コーネル大の大学院に留学した。そこで学んだのは、専門家が生民のために計画を遂行するのではなく、住民が計画段階から主体的に参加する、新しい開発手法だった。それを実用しているわけだ。

論説委員 岡田 幹治
(地球プロジェクト21チーム)

手づくり



孤児たちへの職業訓練を兼ねた縫製作業。現地のNGOはこんな活動もしている—アディスアベバのゴジヤムバレンダで、岡田写す

まちに供給を促すわけにはいかないの、条件が折の合わず、採用できなかった人もいた。

難しいのは、現地の行政が認可を得ること。村政、井戸掘りや診療所の建設といった成果を短期間に出すよう求めらる。それに対して、JIPIHは、住民が問題のある

りかめ解決法を自ら考えを過程を確立する。いざおれ、対立することが多くなる。一部は難関、関係の官庁と事業衛生教育もい。

井戸を掘るなどして、清潔な水を確保すること。トイレを使う習慣をつけるといった作物の栽培や畜舎の飼育(農業)と植林活動(林業)を組み合わせていることにより、自然を守りながら生産性の高い農林業を営む「アグロフォレストリー」の導

入。改良型かまどの普及などによる生活改善。農村指導者の養成と住民組織の育成。将来は住民たちが事業が得意な分野にするのが目標だ。

住民の主体的参加を重視

「みんなには」に当たるアムハラ語)エチオピアの公用語)。この通信は、佐々木さんが支援を得ている二百人と四十五団体に、四月月に一戻り一回の割合で送っている。

この手にはかなり長い「家族通信」が載っていて、妻の恵さんが六月二十四日にアディスアベバの病院で、三人目の共産ちゃんを無事出産したてんすが記されている。支援者は一家一精に専らしているような気分、支援を続けるわけだ。

「開業の準備であることは必要だが、NGOとしてボランティアの精神を忘れたい。支援する側とされる側という関係でなく、先進国の住民には途上国の人びとの生活方から積極的に学ぶ姿勢が求められる」

その船の佐々木さんは十一月三日、一月半の一時帰国を終えてエチオピアにたつ。

そのとき、四十五回の報告会を終えているはずだ。